

「悪に負けることなく、善を持って悪に勝つ」

2019年8月18日

『愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。13 聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。14 あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。15 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。16 互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる』と書いてあります。20 「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」21 悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。』(ローマの信徒への手紙12章9～21節)

今日の聖書の言葉は、使徒パウロがローマ教会の人々に送った手紙の一節です。パウロはここで、ローマの信徒の人々にこう言います。「愛は、偽りがあってはいけません」。つまり、表面だけ取り繕うのではなく、心から誠実に相手を愛さなければなりませんよと、言っているわけです。これはイエスさまも同じことを言っています。偽善的でなく、神を愛するのと同じその愛で、相手の人を愛さなければならぬとおっしゃっています(マルコ 12章 29～31節)。

このようにキリスト教信仰というのは、イエスさまからパウロに至るまで、一貫して誠実で真心からの愛に生きることが求められているものなのですね。ただ、どうでしょうか？ どうして、そのような愛に生きることを、私たちはしなくてはいけないのでしょうか？ みなさんは、どのようにこのことを考えているのでしょうか？ 愛ということは大切なのだろうけど、いまいちなんてそれをするのか良くハッキリしていないということはないのでしょうか？ 私も今回この聖書箇所を準備するに当たって、そもそもどうして愛を実践することが必要なことなのかを、改めて良く考えてみました。

私もさんざん聞いてきたことですが、皆さんも良く聞いてきたはずのことに、「救いというのは、神の恵みによるのです。行いによるのではないですよ」と、聞いたのではないかと思います。どうでしょうか、あっているのでしょうか？ 日本基督教団信仰告白において、救いについて書かれている箇所に、こうあります。「神は恵みをもって我らを選び」とあります。これはつまり、私たちが神を選んだから救われたのではないのです。神が選んだからなのですよ、ということですね。まして、私たちの行いが正しかったからでも、豊かな愛に満たされていたからでもありませんね。そして、こう続きます。「ただ、キリストを信じる信仰による」のだとあります。これは、イエス・キリストによって恵みだけで救ってくれる神さまを伝えられたわけですし、そのことを信じること、そのキリストの言葉に信頼すれば良いのですよ、ということですね。このことを、教会では「信仰義認」と呼んで来ましたが。恵みの神に信頼することを義(正しいという意味)としてくれるというものです。「我らの罪を赦して義としたまふ」とありますが、これは私たちが善ばかりでなく悪を犯してしまうものでありながらも、それでもキリストの正しさ、義によって、私たちをそのまま丸ごと受け入れて下さ

るというのが、「信仰義認」の救いですね。このことは、基本的にはどの教派も同じです。カトリックもプロテスタントも、だいたいの教会は同じです（一部では行いによって救われる、あるいは恵みの後は行いで救いが完成されると教えるところもあります）。

では、信じたその後はどうでしょうか？その後、誠実な愛に生きなければ、救いから外されてしまうということがあるのでしょうか。日本基督教団信仰告白では、そここのところを次のように綴っています。「この変わらざる恵みのうちに、聖霊は我らを清めて義を結ばしめ、その御業（救いの業）を成就したまふ」とあります。これは、最初に働いた神の恵みが、結局の所、最後まで聖霊によって働き続けて、私たちが救ったまま成就（達成）してしまうのだということですね。ですので、誠実な偽りのない愛が出来なかったからといって、神の赦しやその愛から漏れるということはないということですね。

この「信仰義認」という救いを、誰が言い出したかといいますと、実はパウロ自身なのです。このローマの信徒への手紙の1章18節から8章の終わりまで、延々とそのことをパウロは説明しています。もし、このローマの信徒への手紙がなかったら、歴史上のすべての教会は道を誤り、行いによる救いというものが、再び支配してしまっていたらと言う人までいるのです。ではなぜ、その当のパウロが、信仰義認について8章もかけて延々と述べてきたパウロが、誠実な真心からの愛を行うことを私たちに求めるのでしょうか。12章から15章まで4章（信仰義認の半分）もかけて、パウロは愛の実践の大切さを述べているのです。コリントの信徒への手紙一の13章では、「信仰、希望、愛はいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」とまで、パウロは言っています。このことは、「信仰義認」の救いと矛盾しているようにも思えます。どういうことなのでしょう？

もう一度、日本基督教団信仰告白に戻りたいと思います。「聖霊は、我らを清めて義の実を結ばしめ」とありました。これは、私たちが少しでも正しい方向に導いて、隣人への愛に生きられるようにして行くのは、聖霊（神の霊）なのだということですね。この聖霊の働きが留まってくれていて、私たちのそばにいつも一緒にいてくれるのだということですね。その他にも聖書には、「世の終わりまであなたがたと共にいる（神）」（マタイ28章20節）とか、「キリストが私の内に生きておられる」（ガラテヤ2章20節）という言葉もあります。しかし、どうでしょうか？その神の霊が自分の所で働いているのって、見えますか？神の愛に留まるということ、そこで赦されているということ。これらはみんな目では見えませんよね。私たちは、どうしても目に見えるところで神の愛が現臨しているところを見てみないと、なかなか納得できませんし、安心できませんよね。もし、側にいる目に見えない神さまに、スプレーで色を付けることが出来たらハッキリ分かるのに、それが出来ません。スプレーで色を付けるというのは、もちろんたとえではありますが、このスプレーを噴射することに丁度当たるのが、これが私たちのできる限りの誠実な愛の行為なのだということです。

ここでの聖書箇所では、「兄弟愛をもって互いに愛しなさい」（10節）とありますが、これは教会の中の人への愛が言われています。一方で、「迫害する者のために祝福を祈りなさい」（14節）とありますが、これは教会員以外のことが言われているわけです。つまり、教会の内と外は関係なく、私たちが手が届く範囲で関わる人と、できる限りの誠実な愛を行って行くことで、神の愛の色を吹き付けて行くのだということです。この神の愛の色の広がりにおいて、私たちが神の赦しや愛に留まっているその範囲が見え、手応えを肌で感じるようになるということですね。

その神の愛が現臨する領域は、「できれば」（18節）という限界はありますが、もし、自分に悪をなす相手に報復をしなかったら、その時、その相手にまで神の愛の範囲が広がるのだということ

です(19節)。この事を具体的に例を挙げて、考えてみたいと思います。3人以上の家族の間で、次のようなことがあったとします。家族の誰か女性が、こう言います。「あーあ、何で私ばかり、食器洗いをしなくちゃいけないの!」と、聞こえるように、嫌みのように言われたら、皆さんならどうするでしょうか?私ならまずこう思います。「しまった!ついつい嫌なことを、彼女ばかりにやらせてしまっていた。まずい、怒ってるな」と。しかしその後で、こうも思います。「でも、そんな傷つく言い方しなくても良いじゃないか。落ち着いた調子で、あなたもやってくれない?とってくれたのなら、快くやるのに。どうして、そういうこちらが傷つくような言い方をしなければならないんだ。彼女は愛がないな」と、自分のことは棚に上げて、相手の悪に対して腹を立ててしまいます。つまり、相手が自分の自尊心を傷つける敵対者として、目の前に立ち現れるわけです。

この時、二つの道を私たちは選ぶことができます。一つは、否定的な言葉に対して、こちらも否定的な言葉や態度で報復するという道です。悪に対して、悪を返すのです。「やれば良いんでしょ!やります、やります、やりますよ!」と、陰悪な行いで応戦すれば、その場は恨みや憎しみに満たされた悪の支配する領域となるでしょう。それは、私たちだけが嫌な思いをするだけではすみません。子どもや年配の家族もみんな巻き込んで、小さな心を痛めてしまうのです。神の愛が見えなくなる暗闇の時です。

私たちはもう一つの道を選ぶことができます。それは、この家族の危機の時こそ、神の愛を現臨させる絶好の機会が訪れたのだという視点を持つことです。悪に負けることなく、善をもって悪に勝つ時です。「いや本当に、僕が悪かったよ。いつも君にばかり嫌なことさせて、本当にごめんなさいね。」と、肯定的で相手の心に寄り添う共感的な言葉と態度をとるのです。それでも、一向に怒りを収めてくれないかも知れません。それでも、怒りが冷めるまで待ち続けます。キリストに祈っていても良いでしょう。「助けてください、私を憐れんでください」と。そう祈るとき、まだ闘いは終わっていないにもかかわらず、キリストの現臨を肌で感じる事が出来るかもしれません。もし、この愛の闘いを最後まであきらめずに闘い抜くことが出来たら、そこに神の国が出現しますね。もしかして、運が良ければこういう言葉を、相手から受け取ることが出来るかもしれません。「さっきは、酷いことを言ってしまってごめんなさい。言い過ぎたわ。それにしても、以前のあなたならなら、あそこで怒り狂って自分は悪くないと言い張るのにどうしちゃったの。変わったわね。自分の悪いところを素直に認められるなんて、なかなか出来ないことよ」。そう言って、先ほどまでの敵対していた人と和解し、返って神の愛を見える形で、共に出現させる協力者へと変容させることが出来たのです。

20節のところにこうあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせなさい(神の愛の言葉を)。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる」とあります。この場合の炭火の炎というのは、敵対者の悪を燃やし尽くすことで悔い改めに導いて、神へ立ち返ることを起こす浄化の炎を現しているとのことです。これは、チェスと将棋の違いに似ていると思います。チェスは相手のコマを倒してそこで終了です。しかし、将棋は相手のコマを手に入れて、自分のコマに変えて用いることが出来るのです。つまり、敵を愛する愛というのは、自分に悪をなす敵対者さえ、神の愛の戦士に変えてしまう、そういう力があるのだということです。

しかし、とは言いましても、これも、無理はしなくていいわけですね。パウロがここで言うように、「できれば」(18節)ということなので、無理をする必要はないのです。無理をすれば、どこかでひずみが生まれて来て良いことはありません。そのことが、どの場合にも適応できるわけでもないのです。イエスさまの姿を見てみましても、そのことがわかります。イエスさまご自身も、

「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」と、言っています（マタイ 5 章 44 節）。しかし、その当のイエスさまが、敵対する神殿の支配層の人たちに向かって、強い抗議をして暴れています（ヨハネ 2 章 13～22 節とその平行箇所）。また、コラジンとベトサイダとカファルナウムという町に対して、呪いの言葉をかけています（マタイ 11 章 20～24 節）。ですから、私たちがそれが出来なかったからといって、なにも負い目を感じる必要はありませんね。神の子でさえも怒りを露わに行動する時があるのですから。

イエスさまがその時に敵対していた人々は、とても大きな力を持っていました。神殿の支配層の人たちは、国を動かせるほどの権力を持っていました。コラジンやベトサイダやカファルナウムも、個人が相手ではありません。町という大きな規模の相手であったのです。簡単に妥協してしまったら、一瞬のうちで消されてしまいます。大きな力で、権力で悪をなす人たちに対して、「敵を愛しなさい」というみ言葉は、単純には当てはめられないということも、覚えておきたいと思います。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」というイエスさまの言葉があります（マタイ 10 章 16 節）。大きな悪を神の愛へと立ち返らせるために、知恵を尽くして慎重に闘う取り組みも必要なのです。それも、偽りのない、ごまかさない、誠実な愛の一つだと私は思います。そういった深淵の闇という神の愛の色もあるのです。

神の愛は、悪に負けることはありません。私たちが、できる限り善をもって神の愛に生きる時、きっと悪を小さくし、消して行くことが出来るでしょう。そのことに、希望と信頼を持って行きたいと願います。